

もぞもぞする現場からの レポート 2025

もぞもぞする現場 4

— 芸術と障害にかかわるひとたちの、アSEMBリー —

もぞもぞする展覧会
しつづける あいだに

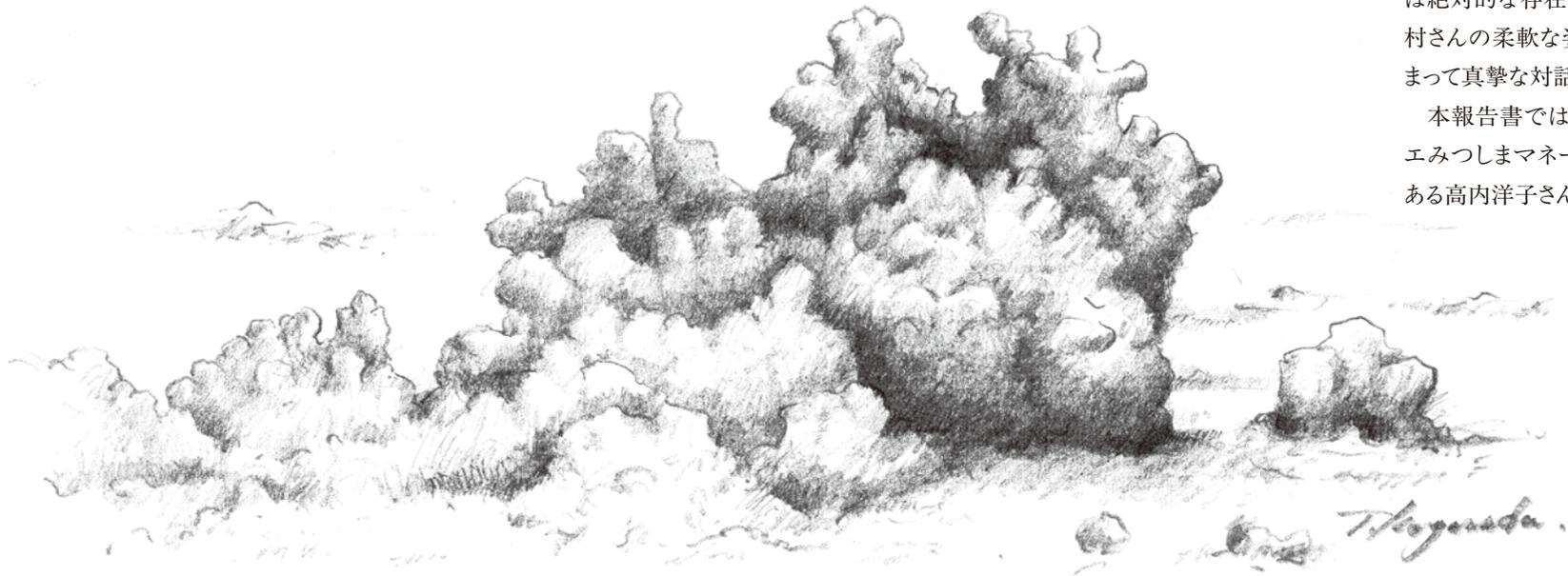
HAPS

目次

- 01 序文
- 02 「もぞもぞする展覧会 しつづける あいだに」展覧会風景
- 06 もぞもぞする現場4
- 08 「もぞもぞする現場からのレポート」 高内洋子
- 18 もぞもぞさんのことば
- 22 もぞもぞする展覧会 しつづける あいだに
- 36 『もぞもぞする展覧会 しつづける あいだに』を終えて」 奥村一郎
- 40 出展作家・ゲストプロフィール
- 41 作品リスト

凡例

- ・図版ページの作品情報はタイトル、制作年を記載した。
- ・技法、材質、寸法などは巻末の作品リストに記載した。



ドローイング(ミズの糞塚)：小山田徹

本報告書は「可能性」の書として読んでください。あるいはここに「不可能性」も読み取れるかもしれませんが。未来の美術館構想講座として開催してきた「もぞもぞする現場」は4年目を終え、大きな進展をたぐり寄せた手応えがあります。「障害」「アート」「美術館」とは何かと考え、議論し続け、その成果を少しずつ実践に移してきたことを踏まえて、私たちの全責任において1つの展覧会を企画、実施したからです。その結果はどうだったでしょうか？

「もぞもぞする展覧会 しつづける あいだに」は、2026年1月6日から18日までの13日間、〈アトリエみつしまSawa-Tadori〉で行われました。展示されたのは、〈たんぼぼの家アートセンターHANA〉のアーティスト6名と光島貴之さんの作品。入場者数は392名でした。

展覧会にはキュレーションと鑑賞方法という2つの大きなレイヤーがありました。キュレーションは和歌山県立近代美術館の奥村一郎さんが、鑑賞方法を模索する部分は主に本講座の参加者である「もぞもぞさん」が担いました。事前の4回のMeetingは両者が情報や意見を交換する重要な機会となりました。展覧会制作では、とすればキュレーターは絶対的な存在になりがちですが、本講座では奥村さんの柔軟な姿勢もあり、両者の非対称性が薄まって真摯な対話と計画が可能となりました。

本報告書ではキュレーターの奥村さんと、アトリエみつしまマネージャーでもぞもぞさんの一人でもある高内洋子さんの丁寧な振り返りと、もぞもぞさん

の言葉から、多様な意味を汲み取ることができます。それらを通して以下のような風景が見えてきたように思います。

展覧会では、完成した作品を静かに鑑賞するという従来の美術館での作法を保留にすることによって、「鑑賞の現場そのものを更新する」実験が重ねられたと言えます。もぞもぞさんは単なるガイドではなく、来場者に寄り添い、場の緊張を解くための不可欠な媒介者として活躍しました。高内さんが指摘するように、会場は誰かの家のような親密さと公共的な開放性を併せ持つ「中間領域」として立ち現れ、受け入れ側であり鑑賞者でもある「もぞもぞさん」という存在が、この中間領域を構成していきました。このことで、言葉や身体を駆使した多様な鑑賞が許容され、美術館に「アクセスしづらい」と感じていた層(障害のある方や子育て世代など)を包摂する懐の深さが得られたのではないかと思います。美術館が「静粛さ」を求める空間から、「対話と交流がうまれる生きた場」へと変容した瞬間でした。

一方で、ボランティアへの依存や経済的に不安定なフリーランスには関与しにくいといった制度的な課題も浮き彫りになりました。この実践を継続、拡大するためには、アートと福祉の境界を横断する「中間的な機能」を美術館のインフラや運営構造にどう組み込むかという問いが不可欠となってきます。「もぞもぞ」と流動的に問い、対話し続けるプロセスそのものが未来の美術館の姿であり、今回の実践から得た手応えをいかに幅広い取り組みにつなげていくかが今後の課題と言えます。

中川真

(未来の美術館構想講座事業ディレクター/もぞもぞさん)

中川真 なかがわ・しん

アジアの民族音楽、サウンドスケープ、アーツマネジメントについて研究する。著書『平安京 音の宇宙』(平凡社)でサントリー学芸賞、京都音楽賞、小泉文夫音楽賞、現代音楽の活動で京都府文化賞、アーツマネジメントの成果で日本都市計画家協会賞特別賞(共同)を受賞。京都市芸術振興賞、インドネシア政府外務省文化交流表彰。大阪公立大学都市科学・防災研究センター特任教授。チュラロンコン大学(タイ)大学院 Curatorial Practice コースの招聘教員も務める。





もぞもぞする現場 4

— 芸術と障害にかかわるひとたちの、
アセンブリー

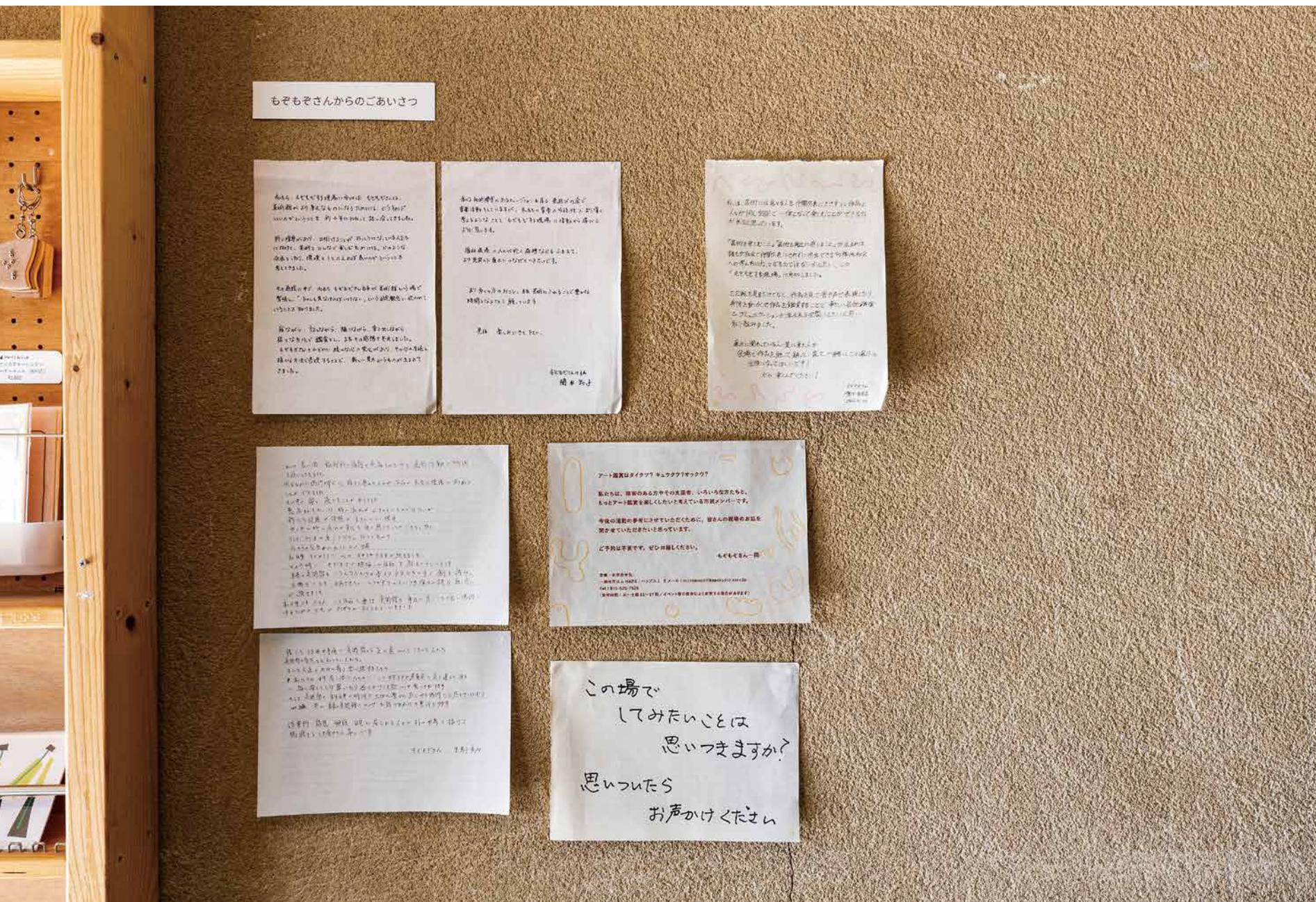
2025年8月-2026年2月

未来の美術館の姿をたぐり寄せたい！ その実践的な試みを行います。発端は「美術館は誰のものなのか」という問いです。美術館関係者？ 行政？ アーティスト？ 美術ファン？ いや、美術館にはもっと可能性があるはず。

今の美術館は、例えば、障害のある人、日本語を母語としない人、閉じこもりがちなたちは来にくい場所です。それを解消するためにアクセシビリティ(行きやすさ)を改善する試みが広がっていますが、「もぞもぞする現場」では、そのみならず、美術館での「鑑賞」や「ふるまいかた」を変化させ、拡張したいと考えています。例えば、寝転がって作品を見ると、全く違った印象をもちます。そんなことできつくないと考えず、今冬に奥村一郎さんのキュレーションで開催する「もぞもぞする展覧会」で、具体的に様々な試みに挑戦したいと思います。

そのために、障害のある人を含め、いろいろな属性のある人たちと協働でミーティングを重ね、美術館の可能性を追究します。そんな美術館は、従来の美術ファンにとっても新たな発見と楽しみの場所となるでしょう。市民である参加者の側から美術館に大胆な提案をする、それがこのプロジェクトの主旨です。

(「もぞもぞする現場4」チラシのリード文より)



2026年1月の「もぞもぞする展覧会 しつづける あいだに」展示室入口に掲示された、「もぞもぞする現場4」参加者(もぞもぞさん)から来場者へのお手紙。

もももずる現場からのレポート

高内洋子

はじめに

わたしはいま、「もももずる現場」の初年度から継続的に関わってきた参加者の一人としてこのテキストを書いています。本レポートでは、アトリエみつしまで全盲の美術家・光島貴之さんと一緒に活動しているスタッフという私的な視点を通して見たものや、自分なりに考えたことを記していきたいと思います。

「未来の美術館はあらゆる人にひらかれてほしい」という大きな動機のもと、4年目のわたしたちは相変わらずもももずと試行錯誤を重ねながらも、これまでの成果を実践に移すために展覧会を実際に開催しました。準備から実践、ふりかえりまでを通して様々な学びを得ることができ、メンバーの意識もぐっと深まった忘れがたい1年となりました。

「考察」と「試行」を経て、4年目の「実践」へ

Meeting ①

これまでの活動をふりかえりつつ、2025年度の目標を共有する
2025年8月30日(土) 13:30-16:30
京都市立芸術大学 カフェ・コモンズ

プロジェクトの拠点である京都市立芸術大学の共有空間「カフェ・コモンズ」で行われたMeeting①では、これまでの活動のふりかえりと今年度の目標共有が行われました。「もももずる現場」では、1年目は芸術と障害について考え、2年目は「未来の美術館」でできることのアイディアを出し合い、そして3年目は実際に美術館などへ出かけて行って、これまでに考えてきたことを自分たちで確かめてみるという小さなトライアルを実施しました。

これまでの「考察」から「試行」までの流れを踏まえて、4年目となる今年度はいよいよ展覧会の開催という「実践」に向けて動き出します。

この日はわたしは海外にいたため参加が叶いませんでしたが、これまでの歩みを振り返りながら、新しい参加者に質問を投げかけてもらう形で活動内容の共有が行われたと聞いています。各参加者は、それぞれの関心や疑問、これから発展させていきたいと思っていることを自己紹介がわりに語り、またゲストキュレーターで和歌山県立近代美術館学芸員の奥村一郎さんからは、過去のキュレーション活動の紹介と、「ももも



もずる展覧会」に向けて考えていることについてお話がありました。総じて、プロジェクト全体の現在地を改めて確認する時間となったようです。

(対話の進行は、Social Work / Art Conference (SW/AC) の小泉朝未さん)

「どうすれば行きたくなるか?」という観点からアクセシビリティを考える

Meeting ②

昨年度に実践した様々な鑑賞方法を、いろんな人にとって面白いプログラムにする
2025年10月5日(日) 14:00-16:00
京都市立芸術大学 カフェ・コモンズ

展覧会ではたんぼぼの家アートセンター HANA の作家と光島さんの作品を展示したい、という案がこの回ではじめて奥村さんから共有されました。ただし、自分一人で展示作品を決定するのではなく「もももずる現場」に参加しているメンバーの意見も聞きたい。これまでのもももずの活動の中で、障害のある人の作品をメンバーがどのように見てきたかということを踏まえて決めていきたいと奥村さんは話しました。

後半は、どんな展覧会にしたいかをグループに分かれて話し合いました。そこで共有された重要な視点の1つに、「来る気にさせる展覧会」というキーワードがあります。障害のある人が行きたいと思う展覧会の条件とはなんだろう。福祉事業所の運営に関わるメンバーの一人はヘルパーさんへの広報活動を提案してくれました。移動支援に関わる人に対して「受け入れ歓迎」の姿勢を打ち出すことで、ハードルがぐっと下がるんじゃないかと。

アクセシビリティを単にバリアフリーの問題として捉えるのではなく、「どうすれば行きたくなるか?」という問いを含む課題としても考えていく必要がある。この日は、展覧会づくりを「環境整備」だけではなく「動機づくり」からも考える視点を共有できた重要な回となりました。



作品についてイメージしながら、「来てもらえる方法」を探る

Meeting ③

具体例をイメージしながら、いろんな人にとっての美術館の過ごし方を考える

2025年11月15日(土) 14:00-16:00

アトリエみつま Sawa-Tadori

11月に入り、実際の展示会場となるアトリエみつま Sawa-Tadoriにて Meeting ③が行われました。わたしの職場でもある会場で、朝から準備をして皆さんを迎えます。

奥村さんからは、もぞもぞメンバーの有志とたんぼぼの家へリサーチに行ってきたという報告がありました。出展作家の候補作品の写真を見ながら説明を受けるうちに、いよいよ具体的な準備段階に入ったのだという実感が湧いてきました。

前回に引き続き、「来てもらえる方法」についての意見交換が活発に行われました。展示会場が位置する京都市北区の福祉事業所に絞って広報をすること。ヘルパーさんを招待して茶話会をすること。フライヤーとは別に、障害のある人やヘルパーさんに来てほしいという気持ちが伝わるような招待状を用意すること。そして、来場者に寄り添う鑑賞ナビゲーターとしてのわたしたちの愛称が、「もぞもぞさん」に決まりました。

展示会場準備が佳境に入りつつあった12月のある日。わたしがいつものようにアトリエで仕事をしていると、毎回欠かさず参加しているメンバーの一人がやってきました。

彼女は「もぞもぞのことなんだけど」と言って、ああしたらいいんじゃないか、こうするのもいいんじゃないかということを一生涯懸命に話してくれるのです。わたしたちは1時間ほど話したあと、次の Meeting は展示会場前の最後だからがんばろうと言って別れました。日常生活に戻ってもなおもぞもぞし続ける彼女はとても生き生きとしていて、わたしは彼女を見送りながら、展示会を成功させたいという気持ちを新たにしました。



プログラム体験モニターさんのフィードバックを受けて、もぞもぞ考える

Meeting ④

「もぞもぞする展示会」の展示会場で、実際になにをどうするかをつめていく

2025年12月20日(土) 13:30-16:30

アトリエみつま Sawa-Tadori

展示会場前の最後の Meeting ④では再びアトリエみつま Sawa-Tadori に集まり、本番を想定して受付から始まる一連の流れをシミュレーションしました。

今年度のもぞもぞには参加方法が2種類ありました。1つはこれまでの Meeting を通じて展示会のプログラムを考えてきた「つくるチーム」。もう1つは「プログラム体験モニター」の人たちで、この日は展示会のシミュレーションに対して客観的な意見や感想をもらうことができました。

面白そうな企画だけどまだハードルが高い。もっと気軽に来られるように。メインとなる作品鑑賞を妨げないさじ加減が必要。モニターさんからのフィードバックの中には、いろんな鑑賞方法を試すことに夢中になっていたつくるチームにとって重要な指摘がありました。

いろいろ試してきた鑑賞方法は本来、作品と向き合い対話することの上に成り立つものであり、作品以外のことがメインになってしまうと本末転倒になるという奥村さんからの意見も、わたしたちが置いてきぼりにしそうになっていた大事なことを思い出させてくれました。

こうしたもぞもぞ自体を続けていく展示会。そのあいだにいろんなことが起こったり、人がつながったりもする。そして、その過程で、障害があることとないことのあいだを考え続ける。奥村さんが考えてくれた「もぞもぞする展示会 しつづけるあいだに」というタイトルは、わたしたちが続けてきた活動がその先へとつながっていく様子を想像させてくれました。

いろいろなことが起こる会場で、障害のある人の作品を見るということ

「もももずる展覧会 しつづける あいだに」
2026年1月6日(火)～18日(日) 11:00～18:00
アトリエみつしま Sawa-Tadori

Meeting⑤

Meeting①～④で考えたアイデアを、「もももずる展覧会」の展覧会場で、実際にやってみる
2026年1月11日(日)・17日(土) 各日 12:00～17:00
アトリエみつしま Sawa-Tadori

「もももずる展覧会」に来た人は、少し変わった流れで展示を体験することになります。受付で説明を受けた来場者は黄色い紙を手にし展示室へ入り、声をかけてくるもももずさんと共に、メニューから選んだ方法で作品を鑑賞します。

用意していた鑑賞方法は、次のようなバリエーションです。

- A. 話す対話鑑賞
- B. 筆談による対話鑑賞
- C. からだを使って鑑賞する
- D. 音やオノマトペで感想を表現する
- E. 寝転がって鑑賞する
- F. つくってみる(釘打ち体験)
- G. メニューにない鑑賞方法で鑑賞する

こうして並べてみても、通常の展覧会ではあまり見かけない方法ばかりです。

受付でこれらを説明すると、興味を示す人もいれば戸惑う人もいました。入室前に多くの情報を受け取ること自体が、1つのハードルにもなり得ると感じました。

展示室からはときおり楽しげな笑い声が聞こえてきました。一人での鑑賞では起こりにくい反応も、誰かと共有することで外へひらかれていく。その体験は、鑑賞という行為にはまだ多くの可能性が残されていることを感じさせるものでした。

トライアングルをたたく2歳の女の子を囲んで大人たちがセッションを始めたり、光鳥さんの作品を鑑賞した視覚障害のある中学生が自分でも釘打ちに挑戦してみたり。会場では来場者どうしの自然な交流も生まれていました。この展覧会ではあちこちでいろいろなことが起こっていて、会場にはそれらを受け止めるようなふかふかした空気が流れていました。近所の放課後等デイサービスに通う小学生たちが会期終了後にやって来て、釘打ち体験コーナーがないことがっかりしていたという後日談もあったし、トライアングルの女の子は家でも楽しそうに話してくれ



ていたのだとか。「もももずる展覧会」が、終わった後にもまた思い出してもらえる展覧会であったことは何よりうれしいことでした。

会場には家族連れから若者、高齢者まで多様な人が訪れ、とりわけ障害のある人の来場が目立ちました。この気づき自体が「美術館には限られた人しか来ていなかった」という事実を浮き彫りにしていました。コーディネーターの内山さんの「自分たちが楽しみにしている展覧会だということが伝わってよかった」という言葉からも、「いろいろな人が楽しみに思える展覧会が少ない」という現状が示唆されていました。

展覧会の体験を言葉を通して深める機会として、会期中には「ギャラリートークともももず対話」が行われました。たんぼぼの家アートセンター HANA アートディレクターの吉永朋希さん、出展作家の光鳥さん、本展キュレーターの奥村さんの3人が障害とアートについて語り、参加者全員での「もももず対話」も行われました。

いつもは現代アートの展覧会に出展することの多い光鳥さんは、「障害のある作家を扱う」という枠組みの展覧会に出展するのは久しぶりのことでした。光鳥さん自身は「そういう展覧会」を避けていた時期があり、自分が障害者アートの枠組みで語られることに強い違和感を抱いていたそうです。障害のある作家がきちんとした批評を受けづらいつことの要因は、障害のある作家についての本格的な研究が進んでいないことにある。光鳥さんは障害者アートをめぐるもどかしさをそう語り、吉永さんもまた同じ気持ちを抱いているように見えました。

光鳥さんには語る言葉があるが、精神・知的障害のある人には異なる感覚があるかもしれない。そんな中で作品や作家をどう評価するのかということは本当に難しいと、奥村さんは正直な気持ちを吐露しています。自分がこれまでも美術館でそうしてきたように、今回も何らかの基準で作品を選んではいるがそれが何なのか今でもわからない。まだもやもやとしていて言葉にしづらいのだと。

「説明のフィルターを通して見ているのか、純粋にアートとして見ているのか」。ここで光島さんが投げかけたのは、わたしたちの鑑賞者としてのあり方を問い直すような一言でした。

わたし自身、この対話を聴きながら、一体どうすれば「純粋にアートとして見た」と言えるのかを自分に問いかけていました。仮に作家の情報を隠したとしても、きっとわたしたちは作品の向こう側に、「障害のない、日本人男性」のような典型的アーティスト像を知らず知らずのうちに見てしまうんじゃないだろうか。大事なのはすべてを隠してみんなが同じ条件なんだというふりをするのではなく、違うということが当たり前になることなんじゃないかな。それは吉永さんが言っていた、「自閉症っぽい絵というのが、日本人っぽい絵、男性っぽい絵という他のカテゴリーと同じようにあってほしい」ということに近いのかもしれない。

そんなときに聞こえてきた、「周りが上手に作らせようとするでもなく、どうしようもなくそのような表現になっているところがいい」というある参加者の発言は、わたしの思いをうまく言い表してくれていました。わたしたちは一人一人違った条件のもとで、どうしようもなくいろんな影響を受けながら生きている。そのどうしようもなさが「自閉症っぽさ」や「日本人っぽさ」であるのかもしれない。

「障害のある人の作品を特殊だと感じる必要はないのかもしれない」という奥村さんの最後の一言は、いろんな出来事を受け止めてきたこの会場が持つ「余白のようなもの」がここから広がれば、誰もが自然にそう思える日が来るんじゃないか、という希望を感じさせてくれるのでした。



「もぞもぞする展覧会」で起こったことをふりかえる

Meeting ⑥ ふりかえりと、次年度に向けての話し合い
2026年2月7日(土) 14:00-16:00
京都市立芸術大学 芸術資源研究センター

展覧会が終わって3週間後、わたしたちはいつものカフェ・コモンズにいました。濃密な2週間を共に過ごしたもぞもぞさんたちの間には、いまだ冷めやらぬ熱が残っていました。

わたしたちはいま感じていることを一人ずつ話していきました。その場にいる人や出来事に寄り添う立場として、もぞもぞさんがいろんな展覧会に存在したら面白いんじゃないか。もぞもぞさんという立場の独自性と可能性が話題に上る一方で、特有の悩みも共有されました。その人独自の鑑賞を妨げないようにするためには、どこまで情報提供するのが適切だったのか。これは、展覧会前に受けた「まずは作品と向き合い対話すべき」という指摘が大切にされていたからこそ生じた迷いであると思われました。

実際の鑑賞を体験したモニターさんからは、寝転がって作品を見ることで視点が変わり、自分が絵の一部になったような新鮮さを覚えたという声もありました。これらを聞きながら、わたしたちがもぞもぞと迷いながら積み上げてきた時間が確かに来場者とも共有され、その体験に反映されていたのだと感じました。しかしその反面、普通の展覧会だと思って来た人にはやはり心理的なハードルがあったのではないかという懸念もあり、ナビゲートの仕方にはまだまだ開拓の余地がありそうだと感じています。

そして、会後半に口コミで来場者が増えたという報告は、好意的な感想が新たな来場者を呼ぶという理想的な形でこの展覧会が広がっていったことを実感させてくれました。

おわりに：もももどさんがひらく、中間領域の可能性

「自分たちが様々な鑑賞方法を楽しむことに夢中になって、障害当事者と美術館の関係について考えることを忘れていないか」。これは、昨年度の最後に参加者の一人が口にした指摘です。今年度のもももどはこの言葉を受け止め、いま一度自分たちの目的を再確認することからスタートしました。

わたしたちは「未来の美術館はあらゆる人にひらかれてほしい」という思いのもと、自らが感じている美術館へのハードル(=障害)について考えたり、鑑賞者として主体的に作品を楽しむためのいろんな鑑賞方法を模索してきました。

そして実践された、「もももどする展覧会 しつづける あいだに」。ある参加者は展覧会を振り返ってこう言いました。家みたいなあの雰囲気が良かった。寝転がったり音を出したりできたのも、あの空間だったからこそだと思う。あれが公共になればいいな。

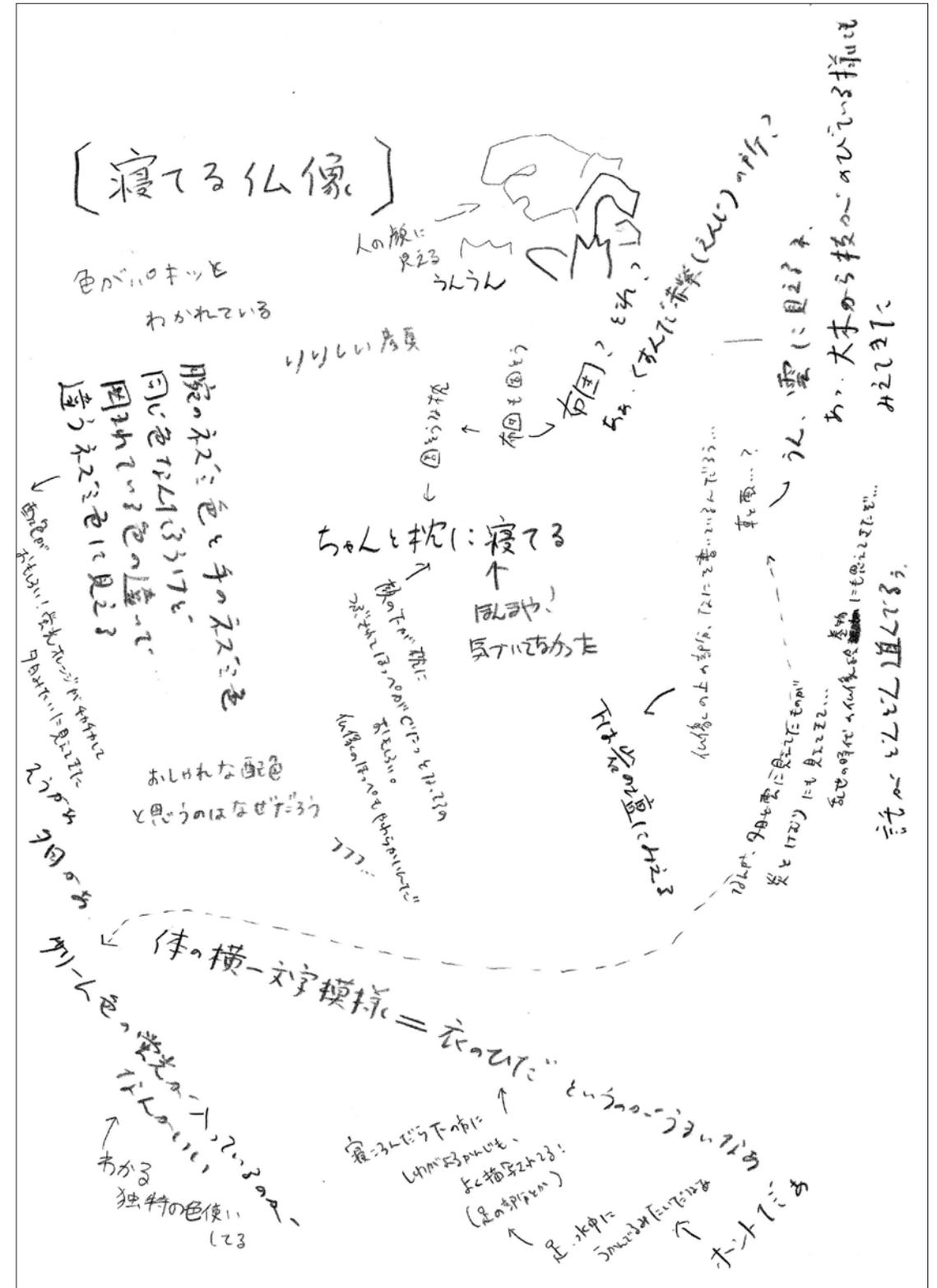
会場のアトリエみつまSawa-Tadoriは民間のギャラリー施設であり、形式上は私的空間にあたります。しかし、不特定多数にひらかれた鑑賞の場として機能していたあの場所は、誰かの家のような親密さと公共的な開放性の両方を併せ持つ中間領域として捉えられるのではないかと思います。会場を中間領域たらしめていたのは、他でもないもももどさんでした。もももどさんもまた、受け入れ側であると同時に鑑賞者でもあるという中間的存在として来場者に寄り添い、あの場をつくっていたのです。

わたしはいま、障害当事者と美術館の関係を良好にしていくためのヒントがここにあるのではないかと思います。もし公立美術館が、中間領域に向かって少しだけ伸び広がったなら。そしてそこにもし、もももどさんがいたら。

わたしたちの公立美術館はもっと楽しいものになる。この小さな実践から得た手応えを来年度につなげていきながら、プロジェクトの成果がこれからの美術館のかたちを探る様々な取り組みに反映されるよう、ていねいに共有していきたいと思っています。

高内洋子 たかうち・ようこ

アートコーディネーター／企画・構成。グループホーム、ホームヘルパーなど障害のある人と関わる業務に携わりながら、2012年より全盲の美術家・光島貴之の専属アシスタントとして作品制作のサポートを行う。2020年よりアトリエみつまマネージャーを兼任。ギャラリー運営全般、および展覧会・ワークショップなどの企画を担う。携わる主な企画として、展覧会「それはまなざしか」(アトリエみつま Sawa-Tadori, 2021年)、アートワーカー(企画者)向けプログラム「CRAWL」選出企画「中屋敷智生×光島貴之<みるものたち>」(BUG, 2025年)、ワークショップ「視覚に障害のある人・ミーツ・アート」(2021年-)、「ぎゅぎゅつと対話鑑賞」(2023年-)ほか。趣味は知恵の輪。



「もももどする展覧会 しつづける あいだに」での筆談シート。山野将志《寝てる仏像》をめぐり、もももどさんと鑑賞者が対話型鑑賞を行った。

もぞもぞさんのことば

「もぞもぞする現場——芸術と障害にかかわるひとたちの、アセンブリー」の市民参加メンバーとして、「芸術」と「障害」について、問いを共有し共に考えてきた「もぞもぞさん」は、今年度の活動をどのように感じたのか。コメントを寄せていただきました。

つくる(研究する)チーム

今回の展覧会ではたくさんの方の発見がありました。作家活動で知り合った関係者も見に来てくださり、また、もぞもぞさんとの交流が深まったり、美術を見ることを楽しむ方とふれあえたり、普段はできないような体験ができました。いろいろと自分が考えていることを外に向けて発信し、展覧会というかたちに結実しましたが、これだけたくさんの方が見に来てくれるものを皆さんと一緒に作れたことで、ひとつ自信がついたかな、とも思いました。

美術館や障害と向き合っていることはなかなか難しいですが、アートという大きな世界にはそういったものを包み込む力があるとよくわかりましたし、結果を残せたんじゃないかなとも思います。また次の展開につなげていけたらと考えています。

(奥西果奈)

「もぞもぞさん」とは、かたわらに寄り添う人——13日間、ほぼ毎日「もぞもぞ」した今、私はそう捉えています。文字通り、老若男女が集うひらかれた場でした。まだカタコトも話せないお子さんとお母さんと一緒に作品に触れ、西陣織に携わってきた年配の方は、ギャラリーがまだ織場だったころの賑やかで雑然とした様子を語ってくださいました。

作品をいろいろな視点から見たり(寝転がる、床に座る、股のぞき)、話を聞いて、そこから感じたこと

を言葉にしたり(対話、筆談)、言葉では表せない何かを体や音で表してみたり…。そのかたわらで一緒に「もぞもぞ」することで、皆さんの考えが広がり、動きもいっそう豊かになっていくように感じました。

今後は、各地の対話型鑑賞にも参加して知見を広げ、今回あの手で起きていたことは何だったのかを考えながら、「もぞもぞさん」の立ち位置を探っていきたいと思います。

そんなことを「しつづけるあいだに」、「もぞもぞさん」があちこちから湧き出てくることを願っています。
(増田和子)

いま私かもぞもぞしながら少しずつ形を変えているように、誰も同じ形には留まれない。それは誰かのため、を想定することの難しさでもある。誰かひとりにとって心地よい場所では、ほかの誰かがこぼれていく。それをわかった上で、それでも知っている誰か、もしくは自分、もしくは作品にとって居心地がいい場所になることを願って、皆でもぞもぞしていたような感覚がある。

今年度の「もぞもぞする現場」の最終形態である展覧会は、居る側も来る側も具体的な誰か一人を想定していたわけではなく、お互いもぞもぞ変わるかたちがたまたまハマった瞬間に互いが煌めく、みたいなものだったようにも感じる。

その煌めきは多様で、ある時は作品の面白さ、

ある時は福祉の現場からの作者へのまなざし、ある時はアートのコンテキスト、ある時は共に踊る身体、ある時は作品を照らす光の美しさだったり。それらが序列なく煌めいていて、もぞもぞさんが4年間積み上げてきた多様な実践の成果を実感した。

私たちもぞもぞさんは、みんな違う形で福祉や障害、アートという言葉に出会い、向き合っていて、全く同じ方向を向いているわけではない。それは、今回の展覧会を訪れた人も同様で、全く同じ方向を向かずとも、共に未来を描いて、各々が異なる煌めきの欠片を拾って持ち帰ることができるような場所が立ち上がっていたことを忘れずに、これからも更にもぞもぞしていきたい。

(藤田梨央)

私は社会福祉学・障害学の研究者です。京都在住で、おそらくチラシで「もぞもぞする現場」の存在を知り、初年度から参加させていただいていました。率直に言いますと、障害とアートが安易に結び付けられることに、以前は慎重な思いがありました。たとえば山下清のイメージにありますように、特異な才能を物語化する語りや、障害者が「努力した」結果として鑑賞者が感動し、心を洗われる、といった予定調和の構図に回収されてしまうケースを数多く見てきたからです。山下清のドラマが放送されていたのは子ども時代でしたので、そうしたイメージに洗脳された世代だと思います。私の障害×アートの世界との出会いはそのようにして始まりました。「もぞもぞする現場」では、そのような古いステレオタイプ化された障害者像は前提とされていませんでした。このことに驚きつつ、楽しく参加させていただきました。今では、友人と呼べるような人も増えました。「もぞもぞする現場」での学びのおかげで、私自身の創作や教育実践にも影響をいただけたと思います。その成果は最近、絵本というかたちで残すこともできました。アートという場を実地で体験できたことに、あらためて感謝しています。

(三島亜紀子)

まず触れることのできる作品をご案内し、気持ちほぐれた方に他の作品をご案内するというように、来場者の気持ちを探り探りお声がけしました。光島さんの作品の釘を撫でて音を鳴らしたり、舟木さんの作品を抱きしめてみたりといった発想は、お声がけしたから気づいていただける場合が多く、意義を感じました。

「釘打ち体験コーナー」のように、利用者さんとヘルパーさんが1対1で取り組む空間があると、会場内での避難場所になります。また、利用者さんの興味が持続して滞在時間が延びると、ヘルパーさんにとっては「また連れて来よう」と感じてもらえると思いました。

何よりお客さんに恵まれ、お声がけすることで場の空気がパッと和らいでいたように思います。これを繰り返していった先に、来場者ともぞもぞさんや他の居合わせた人たちとの間に安心感が生まれ、身体／音で表現する方や、敷き物に座ったり寝転んだりする方も調和のとれた、より懐の深い展覧会になっていくのではないかと感じました。

(土居久礼)

今年のプログラムをもってこの「もぞもぞする現場」は終わるのだと思った。展覧会は1つのケーススタディに過ぎず、普遍性のあるものではない。また、ボランティアで関わる「もぞもぞさん」の社会的状況を鑑みると、続けるのは難しいと思った。この条件下ではフリーランスで働く従来のアーティストは関わるができない。この排除がある中で、社会包摂に関わるアートの現場として適切だろうかという疑問が残った。

終わると思った背景には、もぞもぞさんがそれぞれ展覧会のためにできることをやった結果が結実したというもある。それぞれが個性を発揮していた。そして、「美術館」と「障害」を再検討する機会を生んだ。その背景には、話し合いや遠足などを何度も行い、もぞもぞさんたちの間に関係性が生まれていたことがある。結果、鑑賞者に居心地の良い

さを提供し、その上アトリエの適度な広さ、畳の部屋、家のような雰囲気が相まって、自由な空気をもたらしていたように思う。町の美術施設の可能性を感じたし、京都市／京都府の町家活用、町おこしといった取り組みとの親和性が高そうだった。今後は、アートに限らずさまざまな実践の現場で、今回の取り組みを別プロジェクトとして引き継いでいくといった展開もあり得るように思った。

(関本彩子)

このコミュニティにいることへの緊張がほぐれたからか、様々な立場の方がいらっしやる中でも、積極的に発言し、行動できるようになってきたと思います。毎回、ももももさんたちから学ぶことも多く、実りある活動ができました。

今回の展覧会では、市民でありつつアートに関わりたいももももさんの存在や、動き回ったり、雑談したり、筆談したりといったいろいろな活動が許される空間での展示が、来場者／ももももさん／アーティスト(と、それに関わる施設の方)の新しい関係性の構築につながるのではないかと感じました。また、来場者の方からは、「展示が楽しかった」「(ももももさんと一緒に)面白かった」といった感想だけでなく、「今回の展覧会のように、毎日いろいろできるというコンセプトを大事にしてほしい」「ずっと続けることに意味がある」といった具体的なアドバイスを含むお話もありました。

将来的に、このような活動が広まっていけば、アート作品の新しい活用方法の発見につながるかもしれませんし、美術館の常設展(所蔵しているコレクション)でも同様の実践ができるのではないのでしょうか。

(青木香里奈)

今回の展覧会は私にとって貴重な体験でした。奥村さんという素晴らしいキュレーターとの対話を重ねてスタートした展覧会でしたが、正直なところ

不安でした。

蓋を開けてみると、思いがけなく人と人がつながる場面に遭遇したり視点の違う人たちと出会ったり、時には話に熱中し過ぎてももももさんの役目を忘れることもありました。期間中は、ももももしつづける時間の連続でした。在廊時間が終わる間近の静かな会場で、ついさっきまで聞こえていた様々な音や声、そこにいた人たちの温もりや佇まいの余韻に浸りながら、人が出会い、集い、思いを交わす大切さをしみじみと感じました。

私たち「ももももさん」の声や試みがまだまだ届かない人たちや場所のあることを心にとめて、ももももしつづけたと思います。

(生駒美加)

プログラム体験モニターさん

子どもが生まれた途端、美術館は「気軽にいけない場所」になった。同時に、「美術館やアート施設は、静かに鑑賞できない人は行ってはいけない場所なのだ」という思い込みが、自分の中にあることにも気づかされた。鑑賞するという行為は、これほど不自由なものなのだろうか。そんな中で出会ったのが「ももももする現場」だった。

生後5ヶ月の娘を腕に、不安と期待を抱えながら参加した。そこでは、参加者の希望に沿った多様な鑑賞方法が試みられ、作品や作家へのリスペクトが大切にされていた。触れられる作品に娘が手を伸ばし、音に驚き、やわらかさに頬をゆるめたその瞬間、ふと「いま娘と一緒に作品を鑑賞できている」と思えた。触れることや音を感じることもまた鑑賞であり、さまざまな鑑賞の可能性があるので実感した。

本活動をきっかけに、鑑賞のあり方が少しずつ見直され、美術館やアート施設がよりひらかれた場所となり、鑑賞のかたちも多様になっていけば、もっ

と多くの人とその感動を共有できるのではないかと体験が終わった今も、もももも考えている。

(中島真莉江)

アートを見たとき、自分の中で起きていることがうまく言えずもどかしい思い(もやもや)を抱くことがあります。「ももももする展覧会」のフライヤーを見つけたとき、直感的に「もやもや」は「もももも」してみると解消できるかもしれないと思いました。そんな期待と、展覧会をつくる過程を見たいとの思いで参加しました。

展覧会では、ももももさんやそこに居合わせた人と感想を共有しながら、キャンバスロールに描かれた荒井陸さんの作品を鑑賞しました。展覧会場で、普通に聞こえる声量で会話しながら鑑賞するのは初めての体験でした。それができたのは、ちょっと離れた場所で、作品に触れたり体に巻き付けたりして鑑賞している人がいる、そんな環境であったからかもしれません。

ここでは、作家と一緒に鑑賞した方々のパーソナルな部分と共鳴し合えたような感覚がありました。

感想を共有するための鑑賞には特別な準備は要らず、何人か集まればすぐにできます。「もやもや」は解消されることはありませんが、ヒントを1つ得られたのが学びでした。今度、友人たちと連れ立って即席の「ももももしながら鑑賞」を試みてみたいと思います。

(yas)

私はアートと向き合うことが好きですが、不安になることもある。正解はないとわかっていても、「どう観ればよいのか」「こんな感想で大丈夫だろうか」と迷うこともあれば、鑑賞しづらい環境に出会うこともある。きっと、私以上に不安を感じている人もいるはずだ。

今回、モニターとしてさまざまな鑑賞方法や対

話、Meetingに参加し、アートと安心して向き合える心地よさをあらためて実感した。特に、ももももさんの存在は大きく、「自由に鑑賞し、自由に表現してよい」と、そっと背中を押してもらっているように感じた。

受け止めてもらえている、大切にされているという安心感があることで、作品やアーティストに、より丁寧に向き合おうとする気持ちが生まれるのだと思う。

一方で、多様な人すべてにとって心地よい鑑賞空間とはどのようなものなのか、そのゴールはまだわからない。それでも、理想に向かって皆がももももと考え、対話を重ねていく、その過程自体に価値があると感じている。私も多くの人と関わり、対話を重ねながら、これからもももももと考え続けていきたい。

(上田栞)

ももももさん

「ももももする現場——芸術と障害にかかわるひとたちの、アセンブリー」の市民参加メンバー。“芸術”と“障害”について、問いを共有し共に考える仲間。障害者にとっても、アーティストにとっても、あらゆる人びとにとっても「おもしろい美術館」とは何か? どうしたら、どんなふうに、誰が美術館を変えて行けるのか? を考え、実践している。「ももももする展覧会 しつづける あいだに」では鑑賞ナビゲーターをつとめた。

「ももももさん」のこれまでの活動レポートや動画を、WEB上でご覧いただけます。

https://haps-bunka.space/mirai_2025/





もぞもぞする展覧会 しつづける あいだに

2026年1月6日-1月18日

寝ころがったり、触れたり、踊ったり、着たり、話したり、
つくったり、休んだり…

本展は、福祉施設が取り組むコミュニティ・アートセンター〈たんぼぼの家アートセンター HANA〉の所属作家と、本展の会場〈アトリエみつしま Sawa-Tadori〉のオーナーでもある美術家の光島貴之さんの作品を展示し、それに対して「触れる」「踊る」「寝ころぶ」「話し合う」「休む」「着る」「音を出す」などといった多様な鑑賞アプローチを体現することを試みます。わたしたちは、鑑賞者という立場から、「美術館とはなんだろう」という考察から始まり、「アートとの接し方を変えるには?」「美術館の新しい過ごし方は?」などといった問いへと視点を広げながら、この4年間模索を続けて来ました。それは美術館をわたしたちのものにするという運動でもあり、その一つの提案としてこの展覧会があります。

未来の美術館構想講座事業ディレクター／もぞもぞさん・中川真
(「もぞもぞする展覧会 しつづける あいだに」チラシのリード文より一部抜粋)

「もぞもぞする展覧会 しつづける あいだに」キュレーターズ・ノート

会場での配付資料より

「もぞもぞする」ということば、そしてプロジェクトをあらわす「ミズの糞塚」のイメージをととても気に入っています。ミズがもぞもぞと地中を動きながら土壌を耕すように、障害と芸術のあいだをめぐるさまざまな道筋を辿りながら「もぞもぞする」プロジェクトに、今回私も関わることになり、一緒にもぞもぞするなかで生まれた糞塚のひとつが、この展覧会です。

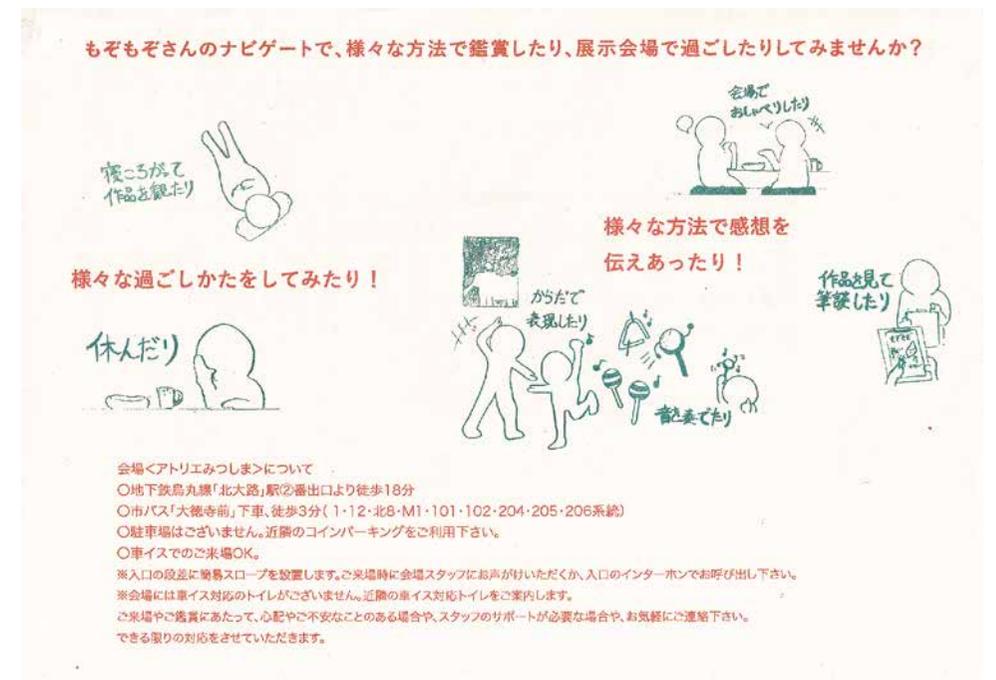
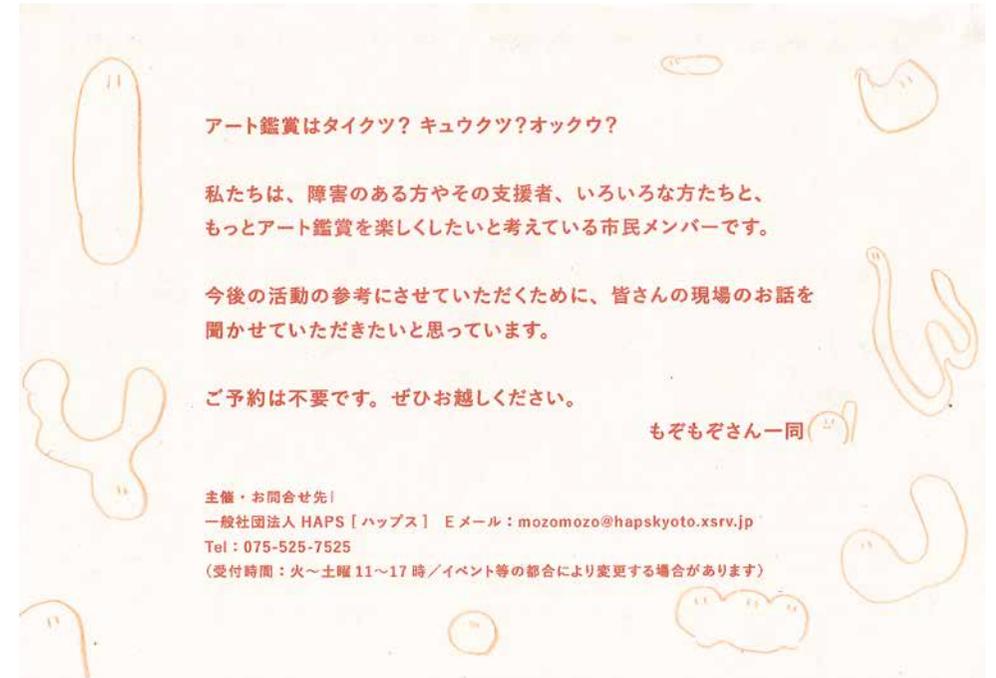
「芸術と障害にかかわるひとたちの、アセンブリー」を通して、市民参加メンバーを含むもぞもぞさんたちは、これまでにアクセシビリティの問題、鑑賞の方法などについてのさまざまな試行があり、展覧会はこれらを含めた実践の場ともなります。

なかでも「寝ころがったり、触れたり、踊ったり、着たり、話したり、つくったり、休んだり…」といったもぞもぞさんたちの作品への多様な鑑賞アプローチに対して、どのように応えるかは、キュレーションの課題のひとつでした。展覧会では、福祉施設が取り組むコミュニティ・アートセンター〈たんぼぼの家アートセンター HANA〉の所属作家と、本展の会場〈アトリエみつしま Sawa-Tadori〉のオーナーでもある美術家の光島貴之さんの作品から展示構成することになり、準備を進める中であらためて気がついたのは、身体感覚を拡張するような表現の多様さと、制作における協働のあり方についてでした。視覚以外の感覚を表現の頼りとする全盲の光島さんの作品はもちろんですが、たんぼぼの家でも鑑賞する側の感覚を開いてくれる作品に多く出会い、もぞもぞの鑑賞としても、いやそうでなくとも魅力的な作品選定となったと思いますでしょうか。

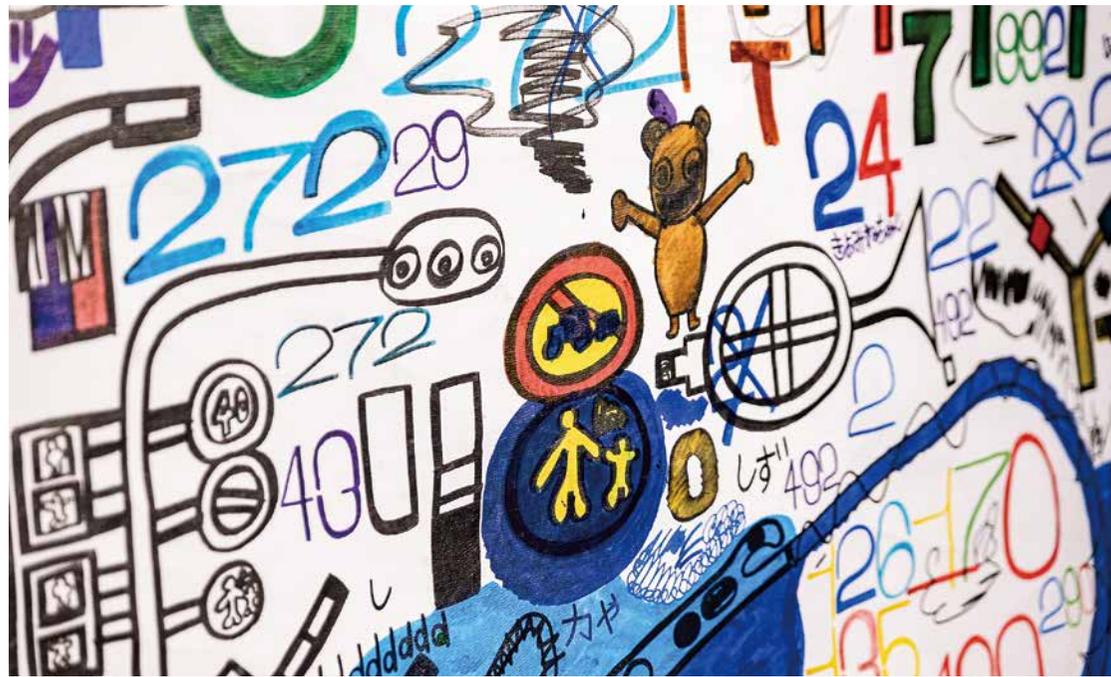
また障害のある方の制作における協働は、近代的な自我に支えられた美術家という存在が創作する作品だけが芸術かという問いや、コレクティブな制作の方法についても参照できるものであるように思います。ともあれ私にとって障害のある方の作品のキュレーションは初めての機会でもあり、障害特性と表現との関係など自分のなかではいまだに解決し得ないことも多々あります。しかし、ここに作品はまさに在るのであって、まず向かい合うことが大切なことであるとも考えています。

自身も含めて、障害と芸術のあいだを、関わるさまざまな人やことのあいだをもぞもぞしつづけるなかで、あちこちに「ミズの糞塚」ができるよいなという思いを込めて、タイトルは「しつづける あいだに」としました。

本展キュレーター 奥村一郎(和歌山県立近代美術館学芸員)



もぞもぞさんが展覧会のチラシに添えたお手紙



《寝てる仏像》 2011

《いものツルのいもの絵》 1997

山野将志



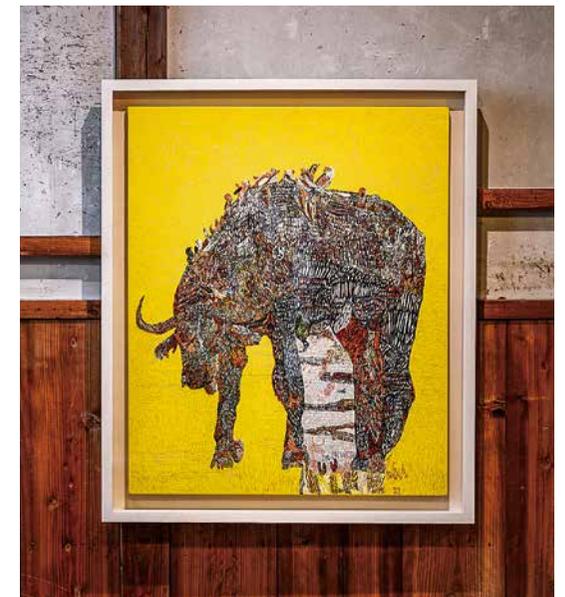
P. 2・3 手前の作品、上（部分） 《青い掃除機・赤い鍵盤・緑の葉っぱ・880・990・248・ピンクのラッパ・黄色い給油機・黄色い掃除機・79・とけい・たいようさん・229・ロディ・黄色いソフトクリーム・黄色いスプーン・標識・鍵盤》 2015

下 イラストレーション 2014-2019

荒井陸



《ヒョウ》 2025



《水牛》 2013

中村真由美



《miamoo. - ミイアムウ -》 2010-2025

福岡左知子



奥左から 《まる きいろ あお》 2025 《まるどちっちやいまとまる》 2023
手前左から 《まる》 2025 《みどり きいろ》 2025 《きみどり きみどり》 2025 舟木花

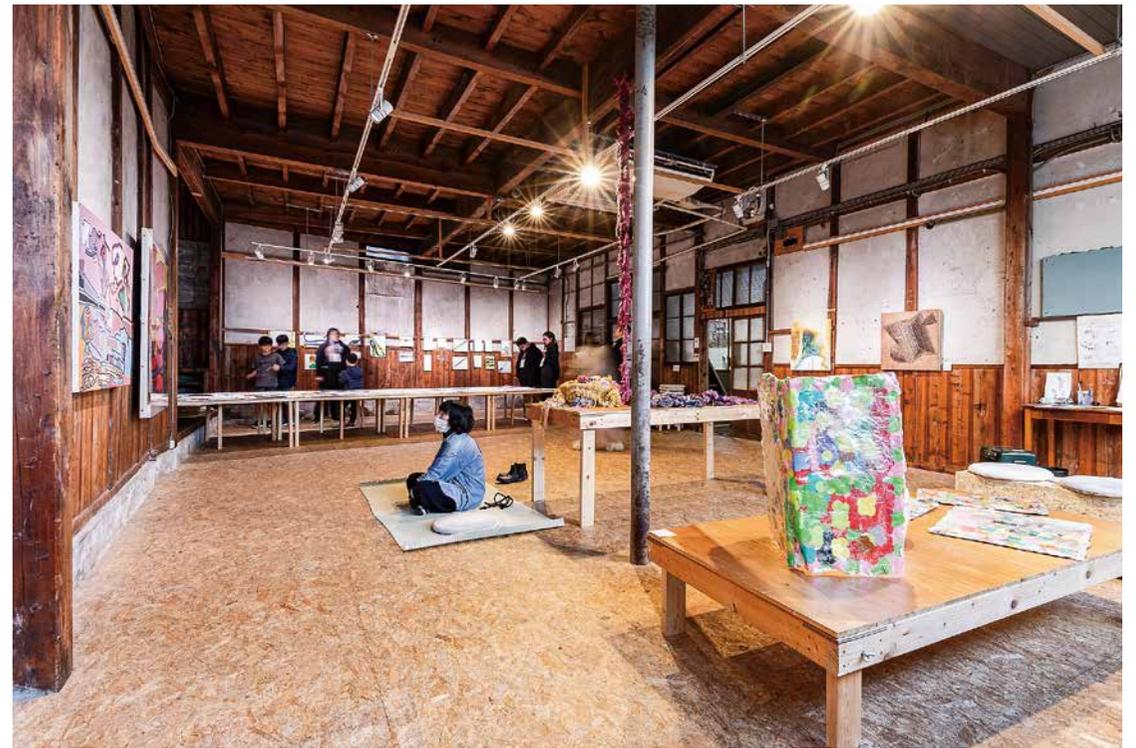


《まなざしNo.5 まちが見ている》 2021



《草原》 2019

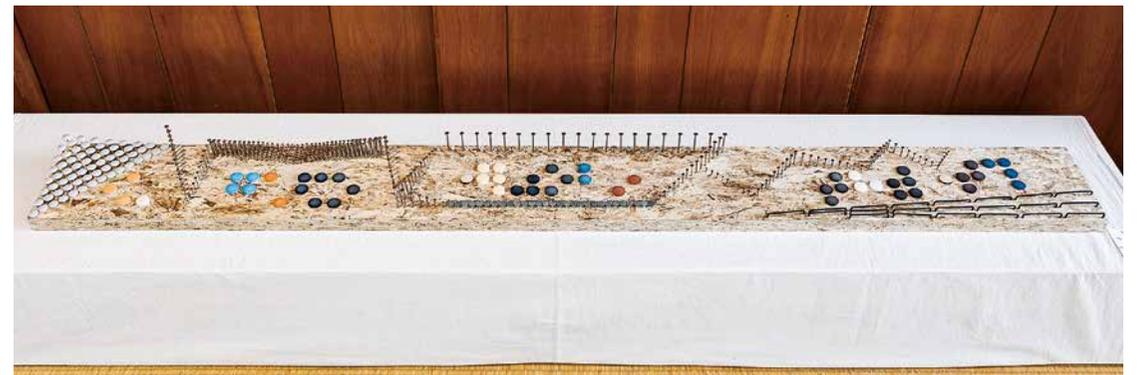
光島貴之





カウンター部屋には、光島貴之の釘を使った作品に関する資料と、「つくるコーナー」が常設された。

光島貴之



《壊れかけた全体を取りもどす》 2024

宿利真希

- 上から
- 《旭松》 2010-2025
- 《おかめ納豆》 2010-2025
- 《ひっこし専門|ハトのマーク》 2010-2025
- 《視力検査|ランドルト環・遮眼子》 2010-2025



光島貴之による作品の下図(テーマ:もぞもぞ) 2024



つくるコーナーで生まれた来場者による作品

寝ころがったり、触れたり、踊ったり、着たり、話したり、つくったり、休んだり・・・





もももぞさんスペシャル(つくるコーナー)



ワークショップ with 光島貴之



ギャラリートークともももぞ対話

会期中のイベント

「ヘルパーさんいらっしゃい」

「美術館へ行くこと」について、障害のある方の支援に関わる方々と語らう日。

2026年1月6日(火)～8日(木) 各日13:00～15:00頃

「ギャラリートークともももぞ対話」

アートセンターのディレクター、出展作家、キュレーターによるギャラリートークと、参加者全員で“芸術”と“障害”をめぐるもももぞ対話の日。

2026年1月10日(土)

13:00～13:40 ギャラリートーク #1

対話 | 吉永朋希(たんぼぼの家アートセンター HANA アートディレクター)
奥村一郎(本展キュレーター)

13:50～14:30 ギャラリートーク #2

対話 | 光島貴之(出展作家)、奥村一郎

14:40～15:10 もももぞ対話

対話 | 吉永朋希、光島貴之、奥村一郎

15:10～16:00 参加者全員で、もももぞ対話

「もももぞさんスペシャル」

寝ころがったり、触れたり、踊ったり、着たり、話したり、筆談したり、つくったり、休んだり…もももぞさんのナビゲートで、さまざまな方法で鑑賞したり、展示会場での過ごし方を味わう日。

2026年1月11日(日)、17日(土) 各日12:00～17:00
ナビゲーター | もももぞさん

「ワークショップ with 光島貴之」

光島貴之さんの作品制作を体験するワークショップ。製図用のラインテープやカラフルなカッティングシート(厚みのあるビニルシート)を使って、ガラス瓶に「さわる絵画」を施しました。

2026年1月11日(日) 13:00～15:00

講師 | 光島貴之(出展作家、アトリエみつまSawa-Tadori オーナー)

協力 | 高内洋子(アトリエみつま)

定員 | 4名

「ワークショップ with 宿利真希」

宿利真希さんの作品制作を体験するワークショップ。宿利さんと一緒に、ダンボールで文字などを切り抜いてつくりました。

2026年1月12日(月・祝) ①13:00 - ②15:00 -

講師 | 宿利真希(出展作家、たんぼぼの家アートセンター HANA 所属アーティスト)

定員 | 各回4名



ワークショップ with 宿利真希

「もぞもぞする展覧会 しつづける あいだに」を終えて

奥村一郎

はじめに

ミズが地中を動きながら土壌を耕し、その結果として糞塚を残すように、障害と芸術のあいだを行き来しながらさまざまな道筋を辿る「もぞもぞする現場」プロジェクト。ここに私も関わることになり、一緒にもぞもぞするなかで生まれた糞塚のひとつがこの展覧会です。ここでは、「もぞもぞする現場」との出会いによる今回の取り組みを、今一度振り返ります。

展示に向けて

私は近年、日本からアメリカに渡った移民たちの美術という、両国の近代美術史において周縁的な存在に位置づけられていた美術に関する研究や展覧会の企画、またいわゆる「美術」の範疇に入らないような物への関心に根ざした活動を行ってきました。これらに加えて、私が美術館教育の実践を行っていることも、今回のキュレーションの依頼理由のひとつでした。しかし、障害のある方の美術については、さまざまなボーダー上に位置するという点で共通項があり、気になる存在ではあったものの、ほぼ未知の領域でした。作品や作家をどのように評価したらよいか、その基準もはっきり持てないなかで、当初はかなり構えざるを得なかったのも事実です。

一方で「芸術と障害にかかわるひとたちの、アセンブリー」を通して、市民参加メンバーを含む「もぞもぞさん」たちは、アクセシビリティや鑑賞の方法について議論を重ねていました。そのなかで提示された「寝ころがったり、触れたり、踊ったり、着たり、話したり、つくったり、休んだり…」といった、もぞもぞさんたちの作品への多様な鑑賞アプローチに対して、どのように応えるかもキュレーションの課題のひとつでした。

「たんぼぼの家」と「アトリエみつしま」——作家、作品と展示構成

展覧会では、福祉施設が運営するコミュニティ・アートセンター〈たんぼぼの家アートセンター HANA〉の所属作家と、本展の会場〈アトリエみつしま Sawa-

Tadori〉のオーナーでもある美術家の光島貴之さんの作品から展示を構成しました。もちろん障害のある方の作品は他の多くの施設などでも制作されていますが、網羅的に調査した上での企画は時間的にも困難でした。そこで今回は「もぞもぞする現場」の活動とも縁の深い、たんぼぼの家、そしてアトリエみつしまとの連携を軸に考えることにしました。

たんぼぼの家からは、アートディレクターの吉永朋希さんに、もぞもぞさんの鑑賞実践や課題も伝えた上で、作家や作品を紹介していただきました。鑑賞方法に合わせて作品を選択することは本末転倒になるので避けたいと思いながら、しかし準備を進めるなかであらためて気がついたのは、身体感覚を拡張するような表現の多様さでした。視覚障害があり、視覚以外の感覚によって表現する光島さんの作品はもちろんですが、たんぼぼの家でも鑑賞する側の感覚を広く開いてくれる作品に多く出会いました。その理由が障害と関わるのか、あるいは施設との協働による結果であるのか、何であるのかは引き続き探る必要があります。

たんぼぼの家では、荒井陸、中村真由美、福岡左知子、舟木花、宿利真希、山野将志という6人の作家の作品を選びました。そして織物工場を改装した〈アトリエみつしま Sawa-Tadori〉の、いわゆるホワイトキューブではない空間に合わせた展示構成を試みました。結果としては、この変化に富んだ空間での展示が、来場者により身体的な鑑賞体験を促すことになったと思います。

荒井さんは、掃除機、鍵盤など音が出るものに反応して、それらをマジックペンなどの線によって画面を埋め尽くすように描いています。今回は巨大なキャンバスロール作品を滝のように上から吊るし、背景にそのモチーフを描いた紙片の数々を展示しました。福岡さんの色とりどりの糸からなる長細い織り作品は、1点は天井から吊り、他は自由に触ったり体に纏ったりできるようにしました。丸いかたちをたくさん切り抜き、シールとテープで貼り合わせて作られた舟木さんの作品も触ったり抱えたりもできるものです。中村さんの絵画は、細部まで緻密に描かれる作品がある一方で、モチーフを大胆に図様化した抜けたような表現もあり、その振り幅の面白さも示すため2点を展示しました。山野さんは、太い輪郭線と独特の色使いで対象を描き出すことが魅力ですが、床に寝ながら鑑賞できることも想定して、寝ている仏像の絵と、最初期に描いたというさつまいもの絵を選び、展示しました。そして、光島さんは、正方形のキャンバスに、オイルパステルやラインテープ、糸などを用いて、自宅からアトリエまでの道筋やさまざまな地形があらわされた作品と、同じく正方形の板に釘が打たれ、触れた時に読み取れる高低差とそれらの釘を弾く音によって地形を感じる作品を展示しました。

ワークショップにも使われた、靴を脱いであがれる畳の部屋(カウンター部屋)には、関連する宿利さんと光島さんの作品を展示しました。窓に吊り下げた宿利さんの作品は、鳩やおかめ、旭松などさまざまなメーカーのマークなどがモチーフとなっています。これらは宿利さんがスタッフに細かく指示して作られたものです。そして宿利さんの判断で合格したものだけが残り、さらに宿利さんに仕上げられて作品となるのです。宿利さんのワークショップでは、「柱」「象」といった漢字をダンボールで制作しました。宿利さんの出す漢字のお題に従って作られ、認めら

れたものがある一方、そうでないものは容赦なく捨てられている様子が印象的でした。また光島さんによるラインテープを使ってガラス瓶に「さわる絵画」を制作するワークショップも開催されました。そして作品に就っての釘打ち体験も随時行われ、夢中になって取り組む姿が多々見られました。

鑑賞体験の拡張と「アトリエみつしま Sawa-Tadori」という空間

この展覧会では、一般的な美術館や展示空間ではタブーとされる「寝ころがる」「踊る」「音を出す」「展示物に触れる」といった行為を肯定しています。空間設計においても、身体の動きや感覚の多様性をそのまま受け入れることを意識しました。展示はもぞもぞさんと何度かの会合を持ち、対話を積み重ねるなかで考え、具現化していったものです。

そして作家たちの表現は、視覚中心ではなく身体全体での鑑賞を起点にするという本展のテーマに寄り添い、観るだけではなく「関わる・参加する」鑑賞体験を可能にしたと言えます。作品に触れることや寝ころがることを否定するのではなく、ここではむしろ作品への身体的関与が促されていました。来場者が空間内で自由に過ごし、身体性を持って作品と関わることを前提とするこの実践は、展示空間全体を「鑑賞行為の共同実験場」とすることにつながりました。

例えば、荒井さんの大きなキャンバスロールの作品に反応してシャウトしたミュージシャンの方がおられ、さらにトランペットを持参してこの絵と一緒に演奏されたのです。決して予定されたパフォーマンスではなく、作品が呼び起こした反応であることが重要です。

このような「鑑賞」と「生活行為」の境界をあいまいにする取り組みは、既存の美術制度が前提としてきた静謐な空間での鑑賞体験や視覚優先の価値基準への問いかけであり、展覧会そのものを「生きたプロセス」とすることにつながったと思います。

先述した通り、〈アトリエみつしま Sawa-Tadori〉は、視覚障害を持つ光島貴之さんというアーティストがオーナーであり、その活動は高内洋子さん、亀井友美さんというスタッフに支えられたスペースです。障害と美術をめぐる数々の実践が蓄積された空間である意味は大きく、さらにそこにもぞもぞさんによるオペレーションが加わることで、「良く過ごす場としての展示空間」を生み出すことができました。

「しつづける あいだに」

「もぞもぞする展覧会 しつづける あいだに」では、多くの余白や「あいだ」をつくることを心掛けました。それは空間的なものだけでなく、表現することと鑑賞することの「あいだ」、あるいは障害の有無の「あいだ」など、明確に境界を引けな

い曖昧な状態としての「あいだ」です。その「あいだ」で、もぞもぞとする揺らぎを展示空間に落とし込み、何かが「しつづけられている」プロセスそのものを提示する展覧会を試みました。

おわりに

障害のある方の制作における協働のあり方や、障害特性と表現との関係など自分のなかではいまだに解決し得ない問いも多々あります。また自由な鑑賞行為が許容される反面、作品固有の意味や制作背景の理解が疎かになっているのではないかという批判もあるでしょう。しかし今回の展覧会は、ここにある作品とわからなさも含めてまず向かい合うことを第一としました。

そもそも美術館や展覧会は、あらゆる人に開かれていることが原則です。わからない作品という他者をめぐって、いろんな人たちが行き交ってさまざまなことを言う。それぞれがそれぞれの理由で別のことを思ったり、あるいはよくわからないと思ったりするものだと考えます。そして自分とは違う意見や関心、行動や生き方を許容する寛容さを持てるかどうかという点が大切であって、そうした力を養う場所でもある美術館や展覧会という場所では、鑑賞の多様さも当然守られるべきでしょう。

今回の展覧会では、「あいだ」を取って埋めませんでした。参加したみなさんが、「あいだ」をもぞもぞしつづけるなかで、あちこちに「ミミズの糞塚」ができていたら、そして、さらに続くきっかけとなったのなら、とても嬉しく思います。

奥村一郎 おくむら・いちろう

和歌山県立近代美術館学芸員。「もぞもぞする展覧会 しつづける あいだに」キュレーター。アメリカへの移民と美術、近代日本の写真、サウンド・アートなど様々な領域での企画・展示や、「なつやすみの美術館」シリーズなどの教育普及活動に携わる。近年担当した主な展覧会は、「トランスボーダー 和歌山とアメリカをめぐる移民と美術」（2023年）、「なつやすみの美術館12 妻木良三 はじまりの風景」（2022年）、「ミティラー美術館コレクション展 インド・コスモロジーアートの世界」（2022年）、「島村逢紅と日本の近代写真」（2021年）、「特集展示 鈴木昭男 音と場の探究」（2018年）など。

「もぞもぞする現場4―芸術と障害にかかわるひとたちの、アセンブリー」

実施概要

期間 | 2025年8月-2026年2月 全6回・7日間

会場 | 京都市立芸術大学 (京都市下京区下之町57-1)、アトリエみつま Sawa-Tadori (京都市北区紫野下門前町44)

共催 | 京都市立芸術大学

協力 | 京都市

ゲスト | 奥村一郎

参加者 | つくる (研究する) チーム10名、プログラム体験モニター5名

対話の進行 (Meeting ①) | 小泉朝未 [Social Work / Art Conference (SW/AC)]

言い出しっぺ |

佐藤知久 (言葉を見つける人)、小山田徹 (緩なす人)、今村遼佑 (想う人)、阪本結 (手を伸ばす人)

船戸彩子 (探る人 * お休み中) 中川真 (耕す人)、内山幸子 (醸す人)

「もぞもぞする展覧会 しつづける あいだに」

実施概要

会期 | 2026年1月6日 (火)-1月18日 (日) 13日間

会場 | アトリエみつま Sawa-Tadori (京都市北区紫野下門前町44)

展示設営 | STUDIO 森森

設営協力 | 西田優史

イラスト | 青木香里奈

受付スタッフ | 高内洋子、亀井友美

ギャラリートークリアルタイム字幕 (UDトーク) 運用 | 林慎一郎、小坂浩之

協力 | 京都市、アトリエみつま、一般財団法人たんぼの家、社会福祉法人わたぼうしの会

ゲストキュレーター | 奥村一郎 (和歌山県立近代美術館)

鑑賞ナビゲーター | もぞもぞさん

青木香里奈、生駒美加、奥西果奈、関本彩子、高内洋子、土居久礼、藤田梨央、四元秀和、増田和子、三島亜紀子 *50音順

もぞもぞする現場からのレポート2025

2026年3月28日 発行

発行元 一般社団法人 HAPS

京都市東山区大和大路通五条上る山崎町 339

<https://haps-kyoto.com/>

ドローイング (ミズの糞塚) 小山田徹

執筆 奥村一郎、高内洋子、中川真、もぞもぞさん

撮影 中谷利明 (P. 2-7, 22-23, 26-32, 33中右と下、34上段、35)、
沢田朔 [一般社団法人 HAPS] (P. 8, 10, 11, 12上、14, 34下)、NPO 法人暖 (P. 13)

編集 内山幸子、奥村一郎

編集協力 有佐祐樹、吉田守伸

デザイン 有佐祐樹

印刷 株式会社グラフィック

主催 | 文化庁、一般社団法人 HAPS

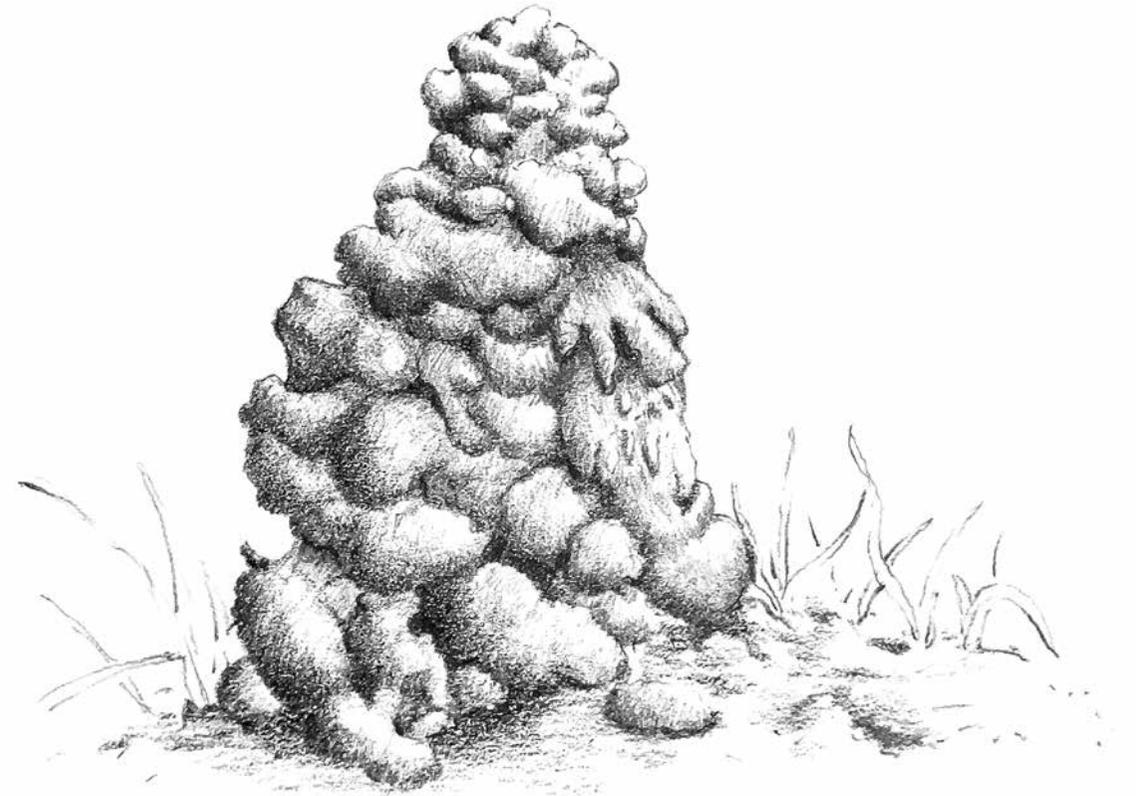
制作 | 一般社団法人 HAPS

未来の美術館構想講座事業ディレクター | 中川真

未来の美術館構想講座事業コーディネーター | 内山幸子

「美術館」と「障がい」の再検討と実践の共有事業：未来の美術館構想講座事業
(文化庁委託事業「令和7年度 障害者等による文化芸術活動推進事業」)

著作権法で定められた範囲を除き、本書の無断での複製、複写、転載を禁じます。



ドローイング (ミズの糞塚)：小山田徹

もぞもぞする現場 4

—芸術と障害にかかわるひとたちの、アSEMBリー—



https://haps-kyoto.com/mozomozo_2025/

もぞもぞする展覧会 しつづける あいだに



https://haps-kyoto.com/mozomozo_2025exhibition/

「もぞもぞする現場」の これまでの活動



https://haps-bunka.space/mirai_2025/